

重修真書太閤記

十一編

十

晴

和書門類

和書門類	三四〇五三號	二二六函	一三架	四〇冊
------	--------	------	-----	-----

第七

內閣文庫	和書類	三四〇五三號	四〇冊	一七二函	一二架
------	-----	--------	-----	------	-----

新刊本

共四十

內閣文庫	
番號	和 34053
冊數	40 (40)
函號	171 45



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



重修真書太閤記十一編卷之廿八

忍の城再度合戦の事

并寄手敗北の事

忍の城要害よく之めりて城中の諸物頭こころを
一のふして堅固に守りてはみよる寄手毎度利を
らしかひあまのさへ水攻の計策を仕そん多く
の士卒を誤ち財寶をばいやせしと關白殿下の御
意くみ入り知れやらみ諸士こころを伐一のふして
堅城みこもりては方攻に及みずたせり成田と
懇意のその城志らたると尋ねたす山中山

大岡巳二編卷之廿八

城守長俊連歌のまゝもつあまと申上りかひを
究竟のともありと長俊は文か、せ成田らめとへ
了意といへば連歌師を法かひとして往復し成田
ら書翰を得たりしかは是を城中へ法か、籠城
のその大か、當方へあ、ろ、ぞ、成通しひよしを
申され、は、よ、よう、友間のあを、処と、ひ、こ、ろ、付、以
成田をめぐこめたり、又或人の日記を、い、ハ、山中
連歌を申は、ろ、け、成田も、ま、の、ち、お、ろ、
籠城のい、し、み、堪、以、相應の返事、成、か、は、い、な
山中發句を送、し、成田照を、法、成田發句を出し
て、山中より、成、この、ち、ど、か、して、往來數度、及

ひは、中、成田、句、よ

花のころ月も、やこの秋の、

とあつ、あ、は、關、白、殿、下、城、中、へ、は、ろ、を、い、か、く、の
ぞ、諸、大名、京都、へ、こ、ろ、城、よ、ま、は、あ、り、ま、は、い、
氏政氏直、は、ら、よ、上、京、せ、以、自、由、に、官、位、を、申、上、大、不
敬の、い、ろ、つ、お、ろ、と、申、され、は、い、ま、よ、う、成、田、め、籠
られ、忍、へ、通、路、も、か、ら、い、あ、り、ま、ろ、忍、の、城、の、
ハ、小、田、原、へ、飛、脚、を、た、て、寄、手、か、く、の、如、く、籠、城、か
は、不、ど、堅、固、な、仕、り、ひ、へ、と、も、岩、槻、松、山、ハ、王、子、か、ど
も、落、城、は、ろ、ま、い、は、か、と、承、ろ、を、よ、び、ハ、尤、ま、れ、ハ
後、援、の、た、の、ま、ろ、お、ろ、今、三、四、十、日、の、持、こ、ろ、へ、申、べ

くゆへども夫をこゝての覽東形かと申はる
 くかども番兵こせ成とめ成田みはらみ知せ
 孫の成田よりの返事かゝ又忍の寄手のあまゝる
 み水攻をかゝり水の落たる跡治とけり泥濘
 はよく三万五千の人数城へちうびくどく
 遠々と陣をとり居たりはかへ關白殿下の御
 下知とて山中山城守忍へ参向し石田治部少輔
 淺野彈正少弼も面會し殿下の御下知の巨細を申
 のべ山城守より籠城のよめへ文をはりて見
 申せりと申けれり石田淺野いひとみりまはへ
 くと申よりの山城守文あゝととまゝめ成田

肥前守のめとへはるちりけり

態と令啓上候當城堅固は御持抱被成候条
 關白殿下御感不斜候弓矢取の本意何事
 これままらん猶以丈夫は御防禦專一は候
 併かゝり下總守殿と長俊多年申通候好
 と云合戦之成行といひ始終の外相談候外
 下總守殿御同意關白殿下へ御出仕有べく
 の外事露現候て當時下總守殿御取籠被成
 候早其城御開渡候とて下總守殿の御本意
 たるべくは是等之趣厚く御勘辨專一は候
 恐惶謹言

六月廿七日

山中山城守

長俊

成田肥前守殿
忍御籠城中

忍の苗守居成田肥前守この状を披見し山中山城守と下總守と年來懇意を通しはたはたはくもよくあつたりはく古き反故茂取いづく見たるも山城守の自筆たるより相違か去かから城を預けし下總守との兄弟三人小田原に出しこめら

は事よことあまへくの小田原より口はくへ何とら沙汰のあはべき筈とおもはかひ小田原へ行し人々も上下かけ千人みちかきそのうち事によし成告さるはよのかしといはれしはうはよ山城守と申通せしものあらをれし此入々しき囚とせしといふとらこの一事あり誤から下總守殿關白殿下へ出仕といふともいひしはかあへ各ふみとおめをけしみやといへ成田大藏少輔同土佐守新田常陸介松岡豊前守かと口をばらへいさぬ肥前守のいさぬ如くこの状よ不審多しこれの寄手の謀計あるへみく我々

大内言一終着持

をだすて開城させいづくは城追かけてうち
捕んとめ軍略と志らねらるる志らば此方もだま
して敵を討ちそよけしとくまふそち返事をいづ
ま

芳札令披見候下總守と年來御懇意之因縁
を以て當城籠兵共助命の義御芳志辱仕合
み候何様下總守殿下へ出仕候上ハ我等式
何の為の合戦も及ひ可申哉城中掃除其外
修復不見苦やう申付早々開城可仕候日限
從是可申入候恐惶謹言

成田肥前守

六月廿八日

忍籠城之者

進上 山中山城守殿

御返報

山中山城守この返事成得てまかりとす
よろこび石田淺野及び諸大將の陣々へ當城
降参かくの如き上ハ仕寄を修復さゆも及む
いひまも休息いへと觸たりしかハ佐竹守都宮以
下の諸大名達成田肥前守と成る剛のその形ゆ
いふふせの城をさへさんとまはやらん不思議の
事よとけくやまける城中ふか名をおも侍三百

大内言一編卷十八

五

余^あ人^{ひと}足^{あし}輕^{かろ}末^{すえ}々^々か^かけ^ける^る千^{せん}余^に人^にあ^あり^りけ^けは^はら^らい^いの^の止^とり
 義^ぎ心^{しん}た^ため^めま^まげ^げ勇^{ゆう}肝^{かん}斗^との^のこ^こと^とを^をめ^めの^のむ^むり^りみ^みし^して
 い^いご^ごこ^この^の書^{しよ}状^{じやう}み^みつ^つき^き一^い方^{ぽう}便^{べん}し^して^てこ^この^の不^ふど^どの^の眠^ね氣^き
 を^を出^ださ^させ^せや^やと^と出^だめ^めひ^ひ法^{ぽう}を^をた^たる^ると^とか^かし^しの^の城^{じやう}あり
 法^{ぽう}か^かひ^ひを^を出^だし^し近^{きん}日^{にち}城^{じやう}を^を御^ごり^りて^て申^{まを}べ^べく^くま^まれ^れみ^み付^つ
 雜^ざ人^{にん}も^もら^ら二^に百^{ひやく}余^に人^にも^もら^らひ^ひ出^だし^しゆ^ゆ我^{わが}申^{まを}け^ける^るみ
 よ^より^り寄^よ手^てま^まじ^じ届^{とど}け^ける^るす^す我^{わが}答^{こた}へ^へる^るの^のち^ち城^{じやう}中^{ちゆう}よ
 り^り成^な不^ふど^ど雜^ざ人^{にん}か^かる^るへ^へ一^い簑^{ふか}笠^{かさ}を^をみ^みか^かひ^ひ兵^{へい}糧^{りやう}の^の苞^{ほう}を
 か^かり^り腰^{こし}に^には^はけ^け竹^{たけ}の^の杖^{じやう}を^をき^きよ^よば^ばく^くし^しき^きの^の出^だ
 たり^り寄^よ手^ての^のれ^れを^をき^きく^くこ^この^の此^{こゝ}邊^{へん}の^の地^ち下^げ人^{にん}の^の夫^{おとこ}は
 せ^せら^られ^れく^くあ^ある^るべ^べし^しあ^あか^かあ^あと^とま^まる^るの^の方^{かた}ど^ども^もの^の何^{なん}處^{ところ}

へ^へ立^た退^{たい}や^やと^と問^とひ^ひそ^その^のま^まの^のど^ども^もこ^この^のま^まは^はの^の我^{わが}々^々
 家^{いへ}の^の焼^やき^き田^で地^ちの^の水^{みづ}泥^{どろ}つ^つり^りたり^り市^{いち}に^にて^てお^おく^くべ^べき^き処^{ところ}
 も^もか^かい^いとい^いふ^ふま^まよ^より^り寄^よ手^ての^の陣^{ちん}々^々の^の五^ご又^{また}六^{りく}人^{にん}つ^つ
 ひ^ひま^まり^りけ^けて^てま^まぢ^ぢの^のい^いち^ちく^くも^も堪^{かん}忍^{にん}せ^せや^やか^かて^て地^ち頭^{づう}
 の^の改^かめ^めり^りし^し時^{とき}え^えの^の田^で地^ちを^をか^かい^いあ^あり^りて^て我^{わが}々^々の^の
 業^{わざ}を^をや^やき^きく^くま^まを^をべ^べり^りと^とて^て台^{たい}置^ちを^をれ^れ我^{わが}々^々か^かひ^ひ城^{じやう}中^{ちゆう}の^の
 容^{よう}子^し我^{わが}々^々の^の孫^{まご}か^かし^しけ^ける^る子^こ何^{なん}れ^れも^も知^ちら^らる^ると^とを^をい
 相^{さう}應^{おう}み^みあ^あら^らへ^へけ^けは^はみ^みよ^より^り心^{こころ}を^をた^たる^る我^{わが}々^々の^の陣^{ちん}中^{ちゆう}の^の水^{みづ}
 く^く海^{うみ}せ^せ薪^{たきぎ}と^とら^らせ^せあ^あど^どし^して^てま^まぢ^ぢの^のあ^あや^やせ^せら^らの^の然^{しか}る^るよ
 七^{しち}月^{げつ}朔^{しやく}日^{にち}の^の夜^よ丑^{うし}の^の時^{とき}も^も出^だづ^づき^き頃^{ころ}俄^{たち}ま^ま大^{たい}風^{ふう}吹^ふ
 い^いづ^づ陣^{ちん}屋^やの^の屋^や根^ねを^をや^やぶ^ぶり^りけ^ける^るみ^み驚^{おどろ}き^きて

諸方の陣屋は是城ふせんとたあゆまざりけ
は石田治部少輔三成の陣所より焼亡おこつて
次第に焼ゆつ終に諸大将の陣屋ふをよび
まへ七十餘棟焼失おまつさへ焰硝ふ火うり
陣々まへ一同に燃あがりける折しゆかの五
人六人別居たつし城中の雑人原いびく行し
そのゆへ衛隊あらひよせていびれも狼狽し前後
混亂の処を見まじり城中より三百余人火消の為
みと喚ぎさきりて切て出佐野天徳寺の陣を散々
み打やぶつたる佐野の陣まて破れしやの守都
宮の陣へ面もふらひさつしつそのくち佐竹

陣ときへく關東の陣々をまらちやぶり勝
關あげし城中へ引てしつ直に追手の柵のちち
陥をのくつ所々城堀さる川水を堰入まじり
つりく夜のおくはをまぢけるみ寄手におひり
よらぬ夜討み仰天し無念かから取とめて城中の
兵誰々とも見しら孫のいゆの手にむかふべく
もか一夜あけて城中をまじりさめあまご立から
べたす旗馬さけし一のも見えんさていもや落
たふみやさつぬみくしいぐ打破り押つりく見よ
やとく柵のちちへこま入の陥におち入手足空
みりらくも何らいやう上も落かざるる目をか

大朝臣二編卷十八

七

ともしいふあやまちたりければ漸々馳こえて
城門をいらんとまきせの堀切いくのところなくあり
ころはとども寄手の大軍ありさめく一方便か
して堀際まきよせしれに城中の兵士のいせも
楯のうへまきせ竹束のかげふんどよりあふた
り寄手いよ怒りいふあせの降参りかから昨
夜のふかまの心得どと口々くのくしれに城中よ
りもねおひせし敷みり城の主なる下總守り殿下
へ出仕と申よよ今日明日のちち入の渡り申へ
し去らに何れへみ我々籠城その詮かしと旗馬
印も引去たり去らはよ今面々の合戦の用意して

よせたあふとまそ心得ぬ降り城を攻るとい夫
の殿下の旋うと、まきせ寄手も言葉ぬくあをれ
あされく扣えり

真田與三郎智謀の事

并忍の城開きつゝ以事

山中山城守忍の城まきかひ籠城の大將成田肥前
守も書翰出くうけるよよ城中より返書到
来し早々開城仕へくはまきり掃除その不手間
取の間日限の追てと申よよ合戦を止めて諸陣
の仕寄をひきまきり陣中不慮に失火及び
ぶその時諸陣のち佐野守都宮佐竹をとりめ關

東衆の手へ夜討ありて討死手負をてみ千四五百人
み及べり夜あけく城はむかへハ城兵どもハ旗
さしものをひきまくらハ茂高くして孫あり居たり
是をむどぬかハ何れへハ夜討せしやといへハ上
方勢をこく寄手ハ何れへ降参せし城をせむはや
といふ是をハ何ともうらハへきと評定はむよぶ
ハ真田安房守昌幸の次男與三郎幸村いよ二十
餘歳のころ武者ありをけりまきこて出下申け
當城をひらかせ申べき了見のゆりかく古老の歴
歴おろしぬけハはしひかえり罷在ハ試み御
はかひとて城中へ参り所存の趣を以て取計ひ

申べきやと申けふ石田治部少輔三成とてさ
まが房列の子息形うけぐめり勝れしハ智謀ハハ
へハ何れもせよ御所望ハまきとへハ御入城ハて
御もらひむかはへくハと許容ハをよハ與三郎
ハかハおほり鎧ぬききて小刀をかりしハ肩衣袴を
着し十五六の小冠者ハ刀拔けけさせ馬よりち
のり大手の城戸ハむかハ是ハ真田安房守の次男
與三郎幸村ハハ關白殿下の御旨ハよハ當城の御
主肥前守とのハ申べきとあつて罷りしハ御門を
御ひらきあるべしと申けしハ肥前守ハをき
此方へとて城門をひらくハ與三郎幸村馬よりをり

小冠者一人召具し城門入りし案内のしきて書院
入通はやくあつて肥前守これも同じく肩衣袴は
八寸さのつの小股差はして座ははき安房守どの
みは御面會申せしともは貴殿みは今日しめて
對面みをよびは殿下の御旨よりし御越と申て
みは去りしは殿下の御使とぞんむはあつて
成田下總り居城みは下總の小田原みはかり在は
殿下の御陣も小田原あつちかき小田原あつて下總
へ仰らはへきを何とぞ此処へ御はうひを賜をう
はみやと申ける時與三郎奉村答る申さく如何も
も殿下より下總どのへ山中山城守り以てたひく

仰入られ下總どのよりあつて意といふ連歌師を以
て御使とせ度とせし仰上られはよその意趣
は殿下と總列より外知たるものもは然るも
そのとかくきとせんと頭をれ終る總列は氏政
朝臣の城中みめしこめらし嚴重な番をきゑられ
は去りしは殿下より御書を法かきしは事し總
列より使をたてまのりし事もあらぬ道理みは去
ども殿下と總列と入魂は事ハ相違はくは總列北
條方みて無二の忠をいふはしはば面々その
心をこゝろして堅固な籠城あるへきとぞみは
總列の召籠らしはしめて面々もあつたあ

大問已二編卷十八

十

べし我道殿下小通路いづれにふよりくかれ
の總列の持ちむかよひ北條方よりて各々必死をい
たされし事きこえぬとよみ早く當城をひらかせ
小田原表かる殿下の御陣へ參上ありて鬼もかく
もして總列を事たへりて城中より取いづりて上
夫をいづれはるべくいと殿下のあひを思召あつよ
きてその旨申せとの御意よいと申されし肥前守
も惘然として去りて詞かかりける大藏豊前か
とを市いす孫手面々もさかよひあるべし下總守
どの乃御事ハ殿下と音信いづれにふよりくさ
籠られしよりか孫手承をよひし事形然れハ

この城入り殿下の御勢と合戦實まいられあは
らばとやく開城ありて去るはるべしとんは各々
何とあされし御分別みやと申はせハいしとも同
意のよしふり奉村よそのよし返答ふをよみ外へ
下總守氏長の法かひ松岡石見も殿下より神谷備
後守を差すへらせし小田原落城し下總守殿下へ出
仕しめゆより忍の城早々ひらきつて申へま
よし申さるは時は淺野弾正少弼の手その持田
口ふり多くうぐれはれはて城深く憤りしは城中
のその一騎一駄入り開城せよと申りてしけしハ
城中のその一同お申はれ今日よて我々所領

のぬしあり。去り侍り開城のちへ。牢人みで妻子
を養ふべき。知行あり。年来たゞ。金銀をもち
いで。こそ。餓死をり。まぬか。侍るべし。あれ。成
た。一騎一駄。出たら。む。五七日。のち。あは
飢て。死むべし。とて。死む侍り。のち。形。侍る。城
中。み。鬼。も。前。も。ある。べし。と。城。を。い。で。返。す。の。事
殿下。の。御。耳。も。入。り。か。重。孫。も。遠。山。右。馬。助。木。下。半
介。を。御。侍。り。ひ。も。資。財。雜。具。も。ち。形。も。出。城。の。ま。の
み。取。せ。し。べ。と。仰。口。も。さ。仕。け。る。み。よ。う。い。の。ま。も。え
質。を。と。り。も。城。出。み。た。り。た。る。も。氏。長。か。ら。の。か。ら
多く。所。持。の。よ。う。か。孫。も。ま。さ。り。め。した。る。ま。の。外。も

成田う所持の黄金千両。上申へくと。御付らと
々。氏。長。黄。金。九。百。兩。か。ら。の。か。ら。十。八。さ。り。上
さ。御。り。び。申。て。ま。の。餘。も。ま。の。さ。く。下。總。守
み。た。ま。も。り。け。り。下。總。守。牢。人。も。下。總。國。百。々。塚。村
み。住。け。る。み。關。白。殿。下。小。山。も。御。勤。率。侍。り。時。氏。長
の。妹。を。御。陣。中。へ。め。さ。し。御。寵。愛。あ。り。ま。は。ま。の。女
兄。も。身。の。ち。へ。茂。歎。を。申。け。る。み。よ。う。野。刈。那。須。の。う
ち。烏。山。も。三。万。石。の。地。を。た。ま。も。り。け。り。或。は。氏。長
の。女。あ。り。と。も。云。ふ。や。も。大。目。も。の。ま。の。女
成田系圖。氏長の嫡子左衛門尉氏範の妹
甲斐姫といふ太閤の妾とあり。この時烏山一万

貫の地をたよみといふ。其の地は關白殿下尾張國中村よりまられたよひ、息隸の起
る將帥とありは、はひも則關の大臣よのぶる長曾
我部を降し、九列を平均し、北條を討て、關東ハケ
國成威撫し、陸奥出羽の遠境よをよみ、介冑の士
矢石の難をかいつらひ、去るもその勲勞あり、ひ
は十年あり、ひハ廿年の久し、其の戦ひて、その禄
ものうみ、百石二百石の増減、猶やさし、去るは、
一箇の妖女ものう、一二寢のあいさみ、三万石の
地を進退し、これ殿下薨りて、墳土いさく、乾かさ
は、またちあち、亂をこれとも、重恩の諸將帥是よ

死をいさひ、そのあき、おゑん、この一挙、戦あつて
おのゝへ

重修貞書太閤記十一編卷之廿八終

重修貞書太閤記十一編卷之廿九

武列河越城の事

并山前四郎左衛門尉武勇の事

武藏國入間郡河越といふ處ハ秩父下野權守重綱

の次男秩父次郎大夫重高ヲ知ルル所也

子重頼河越太郎と稱せしむる所也

續してこの處に住せし後ハ上杉扇谷の所領

とありし所也寶徳元年鎌倉持氏卿の末子永壽正

丸を鎌倉へ還御せしむらせ關東の公方と仰

たてしむる左馬頭成氏卿の御ことなり

後扇谷の修理大夫持朝ハ持氏一亂のとき安房守
憲實一味の最あせハ世の中いふかやく夫切ハ思
ひなゆみより出家して道朝と號ハ字息彈正水彌
顯房ハ家督成つて右京亮馬忠を塔とかりその
身ハ河越子隱居し顯房若年の間ハ家臣尾越の太
田備中守資清を以て陣代となしけるなり顯房こ
の時ものかよ十五歳去りゆみ左馬頭成氏卿次第
ハ年長したまひる御父持氏卿からひみ御兄春
王安王をへり上杉のためみ滅ひたまひしこと成
遺恨み思しるしハ顯房ハ扇谷の館みあはれと
稀ハは孫みハ河越みの住たけけり扇谷の館み

あら孫ハ終者まへ時を得ていさぬみの申あ
しけるみより享徳四年正月五日左馬頭成氏卿武
州上列の敵とれ退治のため鎌倉を首途あつて武
藏國府中高安寺に御陣成めさゆをそはは
へり前ハ誅せらむし管領右京亮馬忠の弟兵部大
輔房顯まへ上杉一家の長者武藏の守護代固麿鼻
和の上杉右馬助憲信入道性順等と共に顯房ハ河
越より出張し同廿一日分倍河原み合戦しける
み上杉一家たかひまけ性順入道深手を負から
くみ高幡寺まへ引去るをいははひみ叶は
腹より失たるこの人ハ安房守憲實と後弟違ハ

此ハ上杉一族入てりたのりてをかくみ思ひ軍の
進退もこの入道をたのりてねふ如斯ありけ
ハ殊まかかふてあへり同廿二日のいくさみ上
杉方入てたのりたる羽續大石以下の歴々多
くうさ上杉勢敗北しけるみよりの頭房後殿して
味方をいさめ踏とまひて戦ひし手の手者
多く戦死し我身も深手負てけむハ河越までハ至
まのり以夜瀬といふ処みまのりも自害したる行
年廿一あるべし持朝入道ハ生長をたのりたる
る鍾愛の嫡子自殺しける成りたるもどもある
べきから孫ハ十二歳ありてその弟房朝を頭房

の跡目とかハ河越城もまさせたりこの時より左
馬頭成氏卿も鎌倉大倉の御所を出御あつて武列
の府中まのり下總古河下河邊みらひにせたまひ
關東麻の如くまのりハこの河越の城も淺間
あつとく長祿元年太田資長をめさし今河越の南
波の館を三芳の郷へらひし要害を建立らしたる
まかちこの城乃大手ハ三好天神と宇佐八幡宮
鎮座あり彼天神と申ハいのこはよう御垂跡や
あまのりハ靈威如何ある故やらん神体ハ神前の
荘嚴みよ五本骨の扇をかけらしたる神秘の玉ハ
あら孫ども扇ハ風をかびかハ炎熱を去形也ハ如

何やうこの城より敵をかびけ悪徒をしりぞけ國
郡を治むべし事ありめよとてか人大き賀し
申けるといふ事この房朝の代りけり房朝のち
修理大夫政真といふ山内乃管領房顯文正元年二
月早世ありしにその嫡子顯定十四歳入て管領
入任し民部大輔入任比同二年九月六日持朝入道
卒去あつし其の修理大夫政真年長たるを以て山
内乃管領かきとも河越を以て一族の長者と仰そ
けるなりまらけり文明五年十一月廿四日政真廿
歳入て卒したる弟の定政を以て家督とあり修
理大夫入任し河越城ををらめ政務のまへて太

大降言十一卷末七

田道灌入道これ城執行ひしかとも持朝の時長尾
尾張守景仲入道昌賢のたぐめたる舊規ふよりて
私かやうけしは高谷の分國よく治りまらけり
は間大将五子入出張したまへども河越の城堅
固にして兵糧運送の便宜をやく比これまつ
く道産昌賢入道の功といふへ同十年正月朔
日成氏卿と両上杉と和睦ありまらけり廿四日
定正河越入かへり顯定の平井入りたまひ入
同十八年扇谷執事長尾昌賢入道の孫四郎右衛門
尉景春後弟の修理亮をよび叔父の尾張守忠景を
うらみ謀殺せしけりを道灌定正も尾張守父

大開記二編卷十一

四

子の庶子形り景春の嫡々形りまやく庶子の寵を
志つぞけて嫡子のうちをまやくらげたまふべ
と申去りども定正これ採用ひたまふべ
於て景春の隠謀を入道は悟られをいかり尾張守
父子の寵をうきくわんとせしを恨み景春はい
謀叛して山内顕定まきかひけり顕定これを入
けるは定正いかりて顕定は景春の叛逆人形り早
くこの方へ出たまへと申されしは顕定は
たのまてさしもの形り只この事の起りの太田道
灌形りといふれは道灌糟屋の館は引こり
是に於て七月廿六日両上杉の兵を以て糟屋へ押

寄けるは道灌高見原まらちいでて戦死したるか
かまのちま扇谷の侍どもはしも忠あつ誤あま
道灌を殺さぬ事ためりからははる形を君の
手は属して非道の死をせんよりいと河越を出て
山内の手はまきかひけるまある定正の嫡子朝良
の執事ありは曾我兵庫頭を河越の城主とかり
その子豊後守成江戸の城は居らむたるこれ河越
の城主の一變せしは形り
或云上杉扇谷の流河越は居れりまきどもこれの
館はくろみて城はあらは城は太田資長のまき
くはありよつて道灌滅亡の後城主はかちつ

といふ

是より兩上杉確執してはひみ十一月廿七日定正
 顯定をらんとく。須賀谷原まで出張ありかこ
 も定正俄に發病しけし。大場の館へ引かへしけ
 けみより山内より江戸川越の西城をとるかここ
 明る年二月より夜晝九十餘日せめしかとも城の
 要害よりいれ落し。河越城合戦のちめなり
 明應三年十月五日定正五十一歳み卒。家督ハ
 五郎朝良なり。朝良の若年ある時。伊豆國
 の早雲入道箱根山乃鹿狩事よせ。人數を石橋湯
 本の邊まゝ操入終。小田原の大森式部少輔實賴

を追いつ。以朝良怒て。これ伐せめん。と分國の勢を
 催をよし。をそく。早雲使を以て。以求御旗下たるへ
 平より。伐申みよ。朝良こ。ゆとけ。和睦をよひ
 ける。去る。けみ。永正元年九月廿七日。山内の顯定并
 小子息。憲房。立河原より。い。朝良と。た。か。ひ。け
 け。朝良ら。ち。ま。け。河越の城。み。入。て。息。繼。居。た。ま。ひ
 ける。を。十月三日。顯定。入道。可。尊。父子。河越の城。を取
 け。こ。さ。く。攻。た。り。け。け。く。三年の春。み。い。の。和睦
 て。朝良ハ。相列。太場。と。武列。河越。の。中間。お。れ。は。と。て
 江戸の城。み。お。め。た。ゆ。か。こ。河越軍の。第二度。お
 大永四年。正月十三日。地條氏。綱。兵。万餘騎。み。て。江

戸へおしよせ七月には修理大夫朝興江戸に去て河
越よりのゆは享禄三年の夏朝興北條氏綱を退治せ
るをとり河越より府中へあいに六月十二日小
澤原にて合戦しゆりか上杉のあまけまゝ河越へ
ひきかへを去りたは朝興天文六年四月廿日河越
にて卒しける末期は蒙督の朝定よむかひ我氏綱
とたくりか本を千四度ふをよふにゆへとも一度も
勝しとぬし我死を候と佛事作善をせとて氏綱
と合戦し氏綱の首を我に取らへよと遺言せしよ
よりとてよその用意を候よとせしは七月
十五日河越の三日木とていふに氏綱數万余騎ふ

大目言上

て逆寄ふおしよせたり河越より左近大夫朝成
大将みて打出合戦しける朝成は平岩隼人正子
生捕と朝定の河越さして落たりしかこゝにもた
まらひ松山の城に逃入たりこの時河越の城に
氏綱の手より山前信濃守を城代として出しを
たり氏康の代みは福嶋左衛門大夫綱成をよかる
去りゆよ同十二年九月廿六日西上杉八万余騎ふ
て河越へよせをころ相麻竹葺の如くを間もあ
く取まきて攻たゆる古河にありは左馬頭晴氏
同年十月廿七日河越へ御動座あり城中糧はきて
よみも難義ありけるよと城をく氏康をく方

大目言上

便して十三年四月廿日の夜八千余の兵をりつゝ
両上杉古河公方の御勢をべく八万余騎の中へ切
てりつけれはあましまどとめを合し心を一の
みあしたるその共おとりのあつてはかこもれは
よあらそと電光石火の如く入り朝定ついで戦死
あり氏康勝利を得たる志はあま氏康多目周防守
をりてあげ螺をふかせ諸軍をあめめ松山ま入
て勢を休めしとかや是よりして河越の城北條の
持とりつ天正の頃ハ山前上野介これを守るたは
上野介ハ小田原よあめつりついでハ當城ハ四郎左
衛門尉を大将みてその弟左近大夫郎等ハ松井

大月記上編卷十九

七

八郎左衛門尉谷村勘三田村玄蕃市村一学あんと
をりめと二千餘騎を籠たるつり志はあま四
郎左衛門尉諸士をあめめて申けるハ今度味方の
城々上列松枝叢輪沼田厩橋下野の佐野定利皆川
結城を落城し近邊ふても針形松山岩槻八王子
あつ合戦必死ふ及みよありはとハ當城ハ
難義ふ及みと加勢のためこかけとハ只あま
不どいさしてけとぬとを戦死をほら思
案もあま人壽百年といへども世流季をよひ七
八十を上壽と五六十年を中壽とい我をてハ四十
歳たとひ上壽を得るともては半をきとる何程

大月記上編卷十九

のたのりとのありて累代の君恩我志却し父祖の
 面を潰さばやといさめられいびきも最きとそ
 んんもあかきとたのめいびき答へたれは四郎左
 衛門尉もよみ嬉しくおのひ酒樽いふめとあふ開
 きさのの看を調してよもとわら酒宴して敵
 をあひ心の内こそたぐしけし寄手の筒井伊賀守
 定次寺澤志摩守廣高生駒雅樂頭親正を大将とす
 て一万八千餘騎四方より取かててをせめば
 可なり
 流布本寄手の中は筒井順慶法印を志依以誤か
 順慶法印は天正十二年八月十一日寂かとの

へ出へき理かし寺澤志摩守廣高の越中守
 廣正の嫡子なり廣正六万石を領して米奉行か

此城平城おれとも堀幅ひろきうへに秩父高麗の
 谷川我せき入たせの水濟々として處ふより四五
 十間より百間ふりをよみ水底ふかくして泥沼か
 しの船をさくべき棹りかし在家を壊ちて堀を埋
 めんとときせりか糸を焼きらみてちかきみの一字
 もあしだおし筏を組り乗入の鉄炮を以て是を
 らちきくむはせとも寄手の大軍なり無二無三の
 乗いらんと筒井勢真先はせくむを城中より筒先

を我らへく。これ我射る。手負死人の山の如く因て
使者我を河越の城堅固にしてよせて毎度敗北
を如何せむへや御下知をもちたてまのると言
上子をよびし如殿下をこゝめしや久し何と
も仰ら後以奏者衆御氣色をうやひ河越の御沙
汰何と申はくしひせんやと伺ひし如殿下か
る不ど河越の城はよくして寄手毎度敗北及ぶ
よ聞食たる河越の城といふは三十四年前に見
し時今とさの相違ある海土地の平みして
沼多く川水の便宜よみかたなりこの城
小城ふしてか東山道ともよ不ど掛へてたれ

のそのま捨をくとも格別上方往來の内まらげ
とあるべき地みも何ら城入り山前上野の弟の
四郎左衛門尉さめりゆへこの四郎左衛門尉の
東國みての指ありの男なり我れか必死ありて
ふせぎたら筒井伊賀守の手入のあまゆへし
又として寺澤生駒かどの寝おびれし顔みても能
あらし眼をさませよといへやと仰らむそのち
の御數奇屋構ま入御あり前野半入召出は
御茶事なりよりの利休宗久かどまかり出しかの奏
者衆退出し筒井はかひみその通り申達し
の使者はそのお引かへし河越みし上意の

大朝臣三編卷十九

十

趣を申すは筒井伊賀守と情かし定次の手
あまのうら四郎左衛門尉と仰らゆか志うら
明日のいひれも當手の勢いで城門を乗やぶり
四郎左衛門尉の首をとら定次がのちをさ
はる二のうらまをさるくへ中と下知しける
生駒雅樂頭寺澤志摩守二人筒井をいさめける
川水自由ふして池沼の泥ふか敵をむかひて
あそ討死せむべし泥や水も入て何とあるへ
末代ののめ笑ひあるべし我をいさめと寝そ
とと仰らゆまより考へはま出さしより
如此城々攻られしと度々ありその時殿下の

御所置をりとしかと仰らゆ形よりよる能
考へはまこの城の要害みて北條家多年
えとこの兵糧玉薬お車かくへからん但千人籠
るといへ下々かけて千三四百人の丈夫もある
へ一日の費を米十三四石と積る今年の春よ
る百八十餘日及べしその費を米二千五六百石
をよるべし兵糧いふ多しとゆ又そのかざり
あつもの形費を米あり益あり終ふ兵糧
ふはる期あるへか生駒の家ははる火
箭の術の兵糧倉を焼べし何とて今まで用ひ
ゆやと仰られし知形より今夜も用ひ申

べくいしゆしり筒井とのふも役所を丈夫に御構へ
 いて城中より切でいづし節御せとをあるましく
 ひと申けしに伊賀守も實も理おけりけりと得道い
 きびしく仕寄をせめり城中の變をもち居たり
 流布本との次は加藤清正城將をせかほ事并は
 木村又藏城中へ使者の事といふ一条ありて加
 藤主計頭清正川越の城下よりいづり城中の体成
 見せからし一奇謀をせめりいづり木村又藏を呼
 いづりその方城中へはひいづり山前四郎左衛門
 尉を説へといひ付けらふより又藏城門へ至

了し時兵士一人たあしく何事みやとらふ又藏
 ちそふはせり今日あふまきと侍と太切のこと
 形人侍てまひいづりいふより四郎左
 衛門尉城中へ叫入對面しけしり又藏降参の事
 をとせけしは四郎左衛門尉弟の左近大夫と謀
 り偽て降らんといふより城記せり去りはふ加
 藤主計頭清正小田原陣に去りかひいと誤り
 十七年十月の廻文
 来春關東陣御軍役の事
 五畿内半役 中國四人役并四國同
 坂より尾刈みいづり六人役

大開言十...

地國六人半役
遠三駿申信この五箇國七人役
右任軍役之旨來春三月朔日令出陣攻平於小田
原北條可有忠勤者也仍如件

天正十七年五月十日秀吉御判

清正の丸外肥後國熊本在城形也此廻文の外
形の又新撰清正記は小田原陣の時關白殿下
兼而添筆以中納言山中之城今廿九日取掛
則午刻に乘崩し城主の事ハ申及及之に首千

餘討捕其外追討不知數以然者明朝日箱根峠
へ為陣取至小田原面可手遣以之糸落去不可
有程以猶追々吉尤右可申聞者也

三月廿九日御朱印

加藤主計頭殿

この外ハ四月八日卯月十二日五月十三日六月
七日七月十二日と合せて六通形御歸陣の時
岡崎まで御迎ふ参らばくとあり

大開言二編卷子九

十三

戌亥の刻も過ぎんとすはるる大地たちおち鳴動
しけるる次第ふをげしとけりいぞと數ヶ所はく
まからへし櫓門扉おとしくゆりくぐりけるみ
よる城中の老若男女おそれまどひ世々たぐいま
滅却すはかたらさかちれ大木の根まぐハ竹林の
中へちりて入て泣きけびくはひまると有様實は
目もあてられしを越え見えりりりかかはれ本丸
の奥詰の丸の下は後棟と形くかけはくりたア
兵糧倉より火いでて天を焦し燃あがりたり只今
らちいでんと大手の虎口におひまうし軍兵とも
いひ進もあててふくめき引かへしけるみえや火

四方へまをり餘烟本丸ををひ書院廣間の屋根
一時は焼たちとルハ黒烟とくくたる中より紅
の布の不ひらめくともおそろしおんとつみさかり
那し夜討もはるるおら眼前も妻や子のけあつ
みむせふ哀も見えてかきく是をたきけんおしけ
るらちみ夜々をやほめくと瞬くると火々
増々盛なやけははるる旭のあかほころ本丸詰の丸
二の丸かけく小屋く一守のあらは焼失はきて
城外を見つとせば降参伐約せしよより陣々の仕
寄成ひまのけ指竹束りかぐせらみ取収めまよ
平常の体みて鎧甲したるものも形くあをれおれ

不ど油断したる処形つ火事のかつせは一定目
ざむしを働かしたらんとの成と後悔せんと
今ハ詮か山前四郎左衛門尉同左近大夫松井八
郎左衛門尉田村玄蕃市村一学かといふものとも
いひしり戰場ふいのちを棄てやと張詰たる氣心
くづし如何ふせやと震のこせし堤のぶら寄
手をいれ昨日までの勢ハそのまゝ持口く
そかへたる上み佐竹宇都宮皆川佐野かんとも爰
みせせ加をうと見え白地又月出したる扇の
旗まへ紺地又三巴白地又二巴紺地又蝶あるひ
ちちぎりの旗澤瀉のたふかと武藏上野下野常陸

み名たるは兵士の家の紋次第し立はるは
れハその勢市めて八九方み及みべし又これ
より遠くへとて只今よせきし勢ありあり
見れハ赤地又白く九巴又三條丸又飛雀あるひ
ハ白地又紺の梅鉢の旗馬けり成上て馳たつる
これハ林より林のまてまではるは三四万
ハありぬへし城中のものとこれハ氣はし勢
はきけるみや一人落二人おち夜のおくはまでハ
九七八百もあつめる兵とも夜明するころハ
めらみ五六十人よきぎはるる四郎左衛門尉よ
みも本意あげよりちあんど弟の左近大夫をたづ

ぬるみ何地ゆきりん音もせびさけらみこれの落
りせしいびくみ在やと城中をのあはかしく形く
かきけるみ本丸の焼跡みらひ形く寝入居たり
いらみくと呼おこせとも應りせし死したるみ
やと見れは息の出入たうか形く何まり乃不思議
みらちようくさくみあしくかは漸々み
て眼を見ひらき四郎左衛門尉をきて大に驚き助
けたまへくと泣けはさ何さぬりのけの
如く去みても寄手と降参を約しめる時刻も既
あかひきさうはらひ四郎左衛門尉一人まの寄手
の陣みくらしやとおのひ鎧ぬぎきて越後布の

本陣記二巻三十一

三十一

帷子よあふし白布の内衣を着く葛のちあふ緋
子の肩衣かけ一尺二寸の服差も三尺二寸の刀さ
さし鹿毛かる馬は黒鞍をきてちのつひ中間
一人の鎧かけさせ城門をひらきて去りくと
乗出ける跡まはききて松井八郎左衛門尉田村玄
蕃市村一学をくめ三十餘人よとぞはるるの志り
はみせのうみ五六町と覺えし寄手の陣あるみ行
ともゆけとも至りのうははる不思議と向ふを
見せの寄手の陣はほど遠しこれのいろみと左右
をくれば見おぬ野山の林の中形く河越の城下
みかくは処のあかりとせのをとおのひ付三十余

本陣記二巻三十一

三十一

人一所は下居てありき。何處にやらんとおわへども
はらみ見ある上知はあらば松井を呼ておくをい
ふの法はやとへへと答りせは田村市村いひち行
りし影もかゝ。四郎左衛門尉まき。あされは
みても正しく河越の城は今朝まであま。そのを
と心をよめ眼をねぶる志を。志て見れは河越
より三十餘里をへてたる關本の里みてぞあ
ける。四郎左衛門尉あまの不思議か。何とあ
る襟もかけたる肌は守はひらき。道了權現
の御影水もひく。十し如く志と。濕て阿う。か
は守袋はぬせもせさる。その御影のぬれく。あそ

あやしけれ。此り。父信濃守り知父ありけし
ハ最乗寺の檀越。如在の祭祀怠慢ありけ
る。みよ。今度の難哉。さくひた。さひ。ゆる。み
も。左近大夫。い。ら。ま。せ。や。らん。と。弟。を。お。め。ひ。出
以。兄。の。恩。愛。神。明。を。通。せ。し。ま。や。左。近。大。夫。の。い。や。く
權現の前。夢。とも。ね。く。ら。め。く。とも。ね。く。茫然。と
て。居。た。り。け。る。兄。の。こ。ろ。ま。き。は。成。て。大。よ。よ
ゆ。さ。び。手。を。取。か。し。た。る。ひ。も。不。思。議。を。や。く
合。權。現。の。利。生。哉。ふ。お。や。の。夜。ハ。寶。前。も。通
夜。けり

北條五代記は關本最乗寺開山了菴和尚の弟子

北條五代記は關本最乗寺開山了菴和尚の弟子

小道流といひくその大力ありけるか我活か
ら天狗とありへ末世永々までこの山を守護せ
んといふ誓願を起して毎日あらしを行をい
まうそとて天狗と形つて山中に住と云云後
氏康の供みある人々大まらぐやひを奪し世
やふ不思議ありやその天狗とやらんハ鳥
獸ら形んといひく私語けむハ俄又大風吹落
樹木を吹倒し震動しけるみよりとる人恐怖
信伐起しハたあま元の晴天とあり
といへり道了の真影ハ小天狗の狐よすか
圖ありし成八十年とあり前美濃國龍泰寺和尚

最乗寺輪番の頃明覺道了和尚と追贈し真影を
あらため今の銅印伐用ゆはとよかしくと善菴
隨筆にいへり四郎左衛門尉道了權現の加被力
みよりて河越城をのかれいでといへり流布
本に加藤主計頭清正み攻ら飯田前兵衛は生
捕仕しを清正繩をとす式代して小田原へ飯
たりまといふり夢中の語睡中の記みて志る傳
へしとらありはるみや
淺草觀音の事
并上杉勢小田原發向の事
武藏國豊嶋郡千束郷淺草寺といふ為人皇三十四

大朝記十一編卷三

六

代推古天皇の御宇定居二年戊子の款の建立なり
 本尊ハ聖觀世音菩薩也ハ船堂西堂淨堂といふ
 三人の浦人網をひくハ魚をかくら朽木一ハ網
 入入とらる是をきて又網をひきたるはよもふ
 朽木を引あひとり取てまのせハよもふハ
 此ハ取まの法王をまべく七度あまの不思議なる
 形也ハこの木を取あつ草叢に置けるハこの木
 より夜ハ光をまかハ草刈童十人あつけるハ
 を以て夜ハ堂をたくりこれに安置しけるハ種
 種の示現あつハハ打集りこの朽木枝よく
 拜むハ朽木ハあらて觀世音菩薩の像ふてせま

くまけけるせれより多くの歳月を経て三人の船
 頭をハ三社の權現と崇め十人の草刈りりへま
 十社權現と現れたまハ觀音菩薩の靈驗ハ身を三
 十三入りりち十方衆生を六種に約ハ六道の群類
 哉まくひたはハ淺草の地ハ東ハ前田川あつハ九
 青龍の浪清ハ西ハ忍の岡まびえハ白虎の尾か
 結界ハ入ハ煩惱の垢をのめから捨てかして罪
 障の雲たちあちハ消滅せり一色一香の樹下ハ十
 界依正の花ちまハ瑜珈三密の窓乃前ハ一十七地
 の行哉まハ以螢雪の功成就して聞法の輩をたの
 しまめ一切衆生の願を充てむかく乃如き靈驗

地我國に七箇所あり山城國に清水寺大和國に初
瀨寺壺坂寺近江國に石山寺尾張國に甚目寺安房
國に那古寺武藏國に淺草寺是れつたくし清水寺
の觀世音の寶龜十一年の草創といふ淺草寺より
百五十二年のちあり初瀨寺觀世音御丈二丈六尺
天平五年五月十八日の開眼あり淺草寺より百六
年の後あり石山寺觀世音丈六の尊像天平勝寶
六年の草創あり淺草寺におくゆ事百廿七年か
かは舊跡おゆを以て往昔より國司の尊崇大かく
あらんかちかく天文四年八月十六日炎燒ありゆ
時の北條氏綱もあつて江戸城にありけしハ觀音

堂ハ十八間四面密迹金剛の二王門鐘樓ハ至徳四
年の鐘我かけ三社權現十社權現錢瓶の辨財食
堂俗室庫裏諸門あつてゆまゝ舊規ふまゝかひ指
圖より元の如く建立ありゆしハ北條家にて崇
敬めつとも篤かりけるより淺草寺の住侶日々
登城して護摩を修まよる當城の留主荒川豊前
守宗勝をよび南條常陸介古市内藏之助大森土佐
守河田但馬守いゆしハ觀世音を信仰し十七日十
八日ごよかからい參詣したるけり折しも越後
勢をよび石田治部少輔三成山岡對馬守以下よせ
まゝゆとゆと篠丸を飛雀の旗五六十流その次

本國記上編卷三十一

大一大万大吉の旗横木瓜のたぐもを間もかく忍
の岡の山下までちかくとまよせし荒川南
條古市の城中へ引かへを荒川の子も同荒五郎と
いふものあり身の長六尺七寸力の五六十人して
引うごかくかく大木を一人して自由も取廻し
ひ色のほめて七八十人う力と見えしけるか
敵の旗の手找見おのら引かへしものさるさよ
某はたての得こそやへりひまひ色敵大勢おれ
の猶以て面白くとも山下城心さし姫の池の中道
をたぐ一騎鎗をまひして馳たりけり越後勢藤田
能登守り先陣夏目舎人助七百余騎入て押々たう

大目言二め三

荒川を見るより夏目下知しけるいむかみよる馬
ささか侍のたぐものからいその上は鎧兜を着し
常の羽織は小袴脚半と見えしはみ合せては鎗の
鞘はさのしたる去らば我等の陣を目みかけた
はと覺ゆはを油断させせと目をくさつてはを
はけて待ところへまこもたのたを以荒五郎ち
かぐくまきよ馬かけを系之れは北條の侍も荒川
荒五郎宗武形今日浅草寺の観音へ参詣しゆる
下向のち越後衆の旗多く見受ては故何事も御
こしはやらんたかみ申承をらんためは罷向
てはといへは夏目侍さく出北條どめ御内

大目言二め三

九

みて荒川と名乗たまふの豊前守どのの御嬪子に
うこれの上杉弾正大弼の侍も夏目舍人助みては
關白殿下勅宣の御使として小田原北條追討ある
みよりの主も上杉もかゝるめ手よりの發向仕さし
北條どのの御内もいさゝか小田原へ御かつつ何
て我々を御待あるへくは途中の參會かひも兵具
はけたまふはかり我々の物詣もあそおちしまを
べけし我々左様の人も打合しておろくは早御取り
あるべくは誰も臆して逃たまふとぞ申す
いひけれは荒五郎さくともめ物詣のかつりも
武具を着袂の相手もたらしといはれくもや豊前

守り子といふは鎧兜を着せしとも目もかけさ
敵をのがして荒川名字の汚名ぬたといひ赤裸
ありとも武士の意地をい立申へし我々の身を
と總長の鎗をまうとら振り面もふらひ
馬を躍せさせいさゝかの夏目侍ともあれ不とむ訶
をはくして理りを立るも左様ある事もあるべき
その義から取こめらち取んと跳まやくはを
馬も踏せたまふよみ如を突ふせ眼たくく間
み十四五人も手を負せ前後左右も狂ひまをけを
舍人助もく荒川のかさりとぞやける
何と仕たりらん荒川さくとも出は鎗をそのを

そのこゝに乘たる馬の平頭を志する子突はる
馬の志をりし跳あかりくるひけしに舎人助鞍よ
もたおらひ下立ち荒川を舎人助をはかんと進
む処へ夏目郎等五七人落合たりし荒川馬
戎引やへし鞍をまひして志ひくと馬をおほま
せけるを見て藤田能登守あをれ勇士や二人當千
との誠まかれをやいふあらんたぐりこのまゝに
かへとも残念なり五六人して追かけて荒川を振
舞をよやと下知しけるみよつ越後侍十三四騎
みよおふたりけり荒川をきつと見て馬より
下立ちあとの小石を拾ひとり十三四間におち付

九月言二の巻三十一

てそのこゝとらちとあはれいぶてあやまの以真先子進
ふ侍の眉間もあはれにそのまゝに越こよたをれ
ふを荒川をれをい目まかけを第二の礫も今一人
ハ鼻をちりれて血をちりてその二人志るはべき
人みやあつたんのありのその共これを介抱せん
と立おさる荒川を追もせは荒川馬を引あからし
歌うさふて姫の池の不越を中道あゆめしを
かよ遠くのびしかに越後衆も見ぬよよて追も
せは藤田の詮かそをちりたりと諸手のその笑
ひみぎあつたるけり加賀の軍兵の板橋より雑司
谷四の谷渋谷を打ちし自黒奥澤をせせきぎて池

大岡記上編卷三十一

十一

上はいつら本門寺陣をとりて一夜をあかして
矢口のいつら上杉勢をまかせ合せ加瀬の小山に
旗をたてておちかきつら城をちめつ藤澤にい
たり清浄光寺を本陣とてあつて後述つそのを
もちかき入へ降参のその城あらため使者をよせて
小田原の本陣はいくさの日記を注進したつら
本關白殿下御覽あつて使者をめし出されし細ら
これ茂誥問あつけるふその城の右手に大形池
のあつたふかた夫より攻いらさつてかの城
乃後入の松の林のあつたはるか今ハあやみやあ
と仰らぬつて使者まことと仰天つていふつて

殿下の九やらは關東の城々をいひのまよ知せ
たまひつてみやと恐る言上しけしなみやとよ
殿下の幼弱の時猿といはれ東國まで木傳ひ
あつたつてつと仰らぬその猿冠をて關白にお
まより後一位の位におつてみやと仰らぬ笑を
せたまひつて御聲のたつたみや

上杉の陣

上

慶應戊辰

重修真書太閤記十一編卷之三終

三

三

三都書林

三條通升屋町	出雲寺文次郎
心齋橋通北久太郎町	河内屋喜兵衛
同 博勞町	河内屋茂兵衛
同 筋木町角	河内屋藤兵衛
日本橋通二丁目	須原屋茂兵衛
同 二丁目	山城屋佐兵衛
同	小林新兵衛
芝神明前	岡田嘉七
水石町十軒末	英子屋大助
大傳馬町二丁目	下子屋平兵衛
横山町三丁目	和泉屋金右衛門
淺草茅町二丁目	須原屋伊八
筋違御門外猿籠町二丁目	紙屋徳八

